

読むことと考えること  
——『日本永代蔵』『古文真宝後集』『町人囊』——

小澤次郎

抄録：本稿は、聖典の読みを通して、古今東西の「叡智」に触れることを目的とする。今回は、対象をひろげて、『日本永代蔵』『古文真宝後集』『町人囊』を検討した。具体的には、1)『日本永代蔵』の冒頭にみる《思想》、2)『古文真宝後集』からの《引用》、3)『町人囊』における《臨機応変と均衡》を、それぞれ検討した。

キーワード：日本永代蔵、古文真宝後集、町人囊、浮世、程伊川、現世享楽主義、引用、臨機  
応変、均衡。

1 『日本永代蔵』の冒頭にみる《思想》

井原西鶴の浮世草子『日本永代蔵』(貞享五〔1688〕年正月)は、つぎにしめす一節から始まる。『日本永代蔵』巻一ノ一「初午は乗つて来る仕合せ」における本文冒頭で、『日本永代蔵』には著作全体に対する序文のないことから推測して、この一節を『日本永代蔵』の著作全体における序文に相当するものと看做して差支えないだろう。(引用の表記に際しては、古文本文・漢文本文・書き下し文の場合は、原則として新字体・歴史的仮名遣いに改めた。)

◆本文(野間 1960:33, 谷脇 1996:23-24, 堀切 2009:142-143 [※左記を参考に小澤が作成]):

天道言はずして国土に恵みふかし。人は実あつて偽りおほし。その心は本虚にして物に応じて跡なし。是、善悪の中に立つて、すぐなる今の御代をゆたかにわたるは、人の人たるがゆゑに、常の人にあらざ。一生一大事身を過ぐるの業、士農工商の外、出家・神職にかぎらず、始末大明神の御託宣にまかせ、金銀を溜むべし。是、二親の外に命の親なり。人間、長くみれば朝を知らず、短くおもへば夕におどろく。されば、「天地は万物の逆旅、光陰は百代の过客、浮世は夢幻」といふ。時の間の煙、死すれば、何ぞ金銀瓦石には劣れり。黄泉の用には立ちがたし。しかりといへども、残して子孫

のためとはなりぬ。ひそかに思ふに、世に有る程の願ひ、何によらず銀徳にて叶はざる事、天が下に五つあり。それより外はなかりき。

◆通釈(谷脇 1996:23-24, 堀切 2009:10-11 [※左記を参考に小澤が作成]):

天道は何も言わず、しかも国土に施す恩恵は深い。人は誠実であつて、その一方で虚偽をなすことが多い。それは人の心が本来「虚」の状態にあり、事物に応じて変化してしかもその痕跡の残らないためだ。これこそ人間が善と悪の間で揺れ動いて生活を過ごす、その「過ごす」の「過ぐ」ではないがまっすぐ正しい当世の御時代をゆったり豊かに生きていく者は、言わば「人の中の人」と言ってもよいでわけで、凡庸な人でない所以である。人の一生のなかの一大事は、この世の中を渡って生活する職業なのだから、士農工商のほか、僧侶・神官に限らず、「儉約大明神」のお告げに従つて、人は金銀を貯蓄せねばならないのだろう。これこそ、両親以外に頼りとなる「命の親」である。人の寿命は、長いと思つても明日の朝まで生きているとはわからないし、短いと思つても今日の夕方に死期にあることに気づくものだ。だから、古人も「天地は推移してゆく万物をやどす旅の宿であり、歳月はちょっとそこに泊まるだけの永遠にさすらう旅人であつて、この浮き世は夢か幻のようなものである」という。瞬間の火葬の煙のように、人が死ねば、どうしてどうして生きている間は貴重な金銀であつても所詮は無

用なものとなるので、瓦や石に劣ってはいる。あの世で金銀が役立つことは難しい。とは言っても金銀を遺産として残しておけば、子孫にとってはきつと役立つものとなった。ひそかに考えてみると、この世にあるほどの願望で、何によらず、銀の力によって実現しないことは、天下に五つ（※「五つ」が何をさすのかは諸説があるが、まだ定説をみない）ある。だが、それ以外はなかった。

この文章で注目されることは、以下に述べる《人間への認識》をしめす点である。すなわち、「天道」という撰理が存在するが、それは人間に直截に語りかけてくるものではない。またその一方で、人間の心の本質が本来「虚」であるために、周囲をとりまく森羅万象の推移に応じて時々刻々と変化してとらえどころがない。その結果として、人間は善と悪の一方に偏ることがなく、善悪の間で漂いながら生きてゆくほかにないのである——。だからこうした《人間への認識論》の上に立って、『日本永代蔵』は人生の教訓や致富に至る要諦を述べつつ、人の世の面白可笑しさや恐ろしさ、その不可思議を描いてゆくことになった。このモチーフは、とても奇妙なことに、近代に特有な問題とされる《実存主義》や《記号論》などの諸テーマを髣髴とさせるものがある。じつは、それほど《近世》と《近代》が《断絶》しているわけではなく、むしろ《連続と不連続》でみてゆく必要が今後あるようだ。

## 2 『古文真宝後集』からの《引用》

ところで、この『日本永代蔵』の文章は、『古文真宝後集』に属する文言を踏まえて叙述されることが知られる。ゆえに本稿では、つぎの三つの引用箇所を、順次、検討する。すなわち検討対象となる引用箇所とは、第一に「天道言はずして国土に恵みふかし」、第二に「その心は本虚にして物に応じて跡なし」、第三に「天地は万物の逆旅、光陰は百代の过客、浮世は夢幻」の三箇所である。

まず、第一の引用箇所「天道言はずして国土に恵みふかし」は、典拠を『古文真宝後集』巻之四「記類」にある王元之「待漏院記」に求めることができる。

王元之（C.E.954-1001）は、諱は禹称、北宋時代の人物で、鉅鹿（現在の河北省）の出身である。太平興国年間に進士となり、右拾遺を努めた。君を諫めて憚ることなく、しばしば左遷されたと伝えられる。「待漏院」とは官舎の名称で、早朝に出仕した大臣宰相が禁裏の開門を待った場所である。「待漏院記」の「漏」とは、「漏刻」

つまり《水時計》のことである。「記」は《記録しとどめる文》のことをいう。ここでは物事の由来を記して後に残す由来記の体裁をとりながらも、実際は大臣たちの無為を戒める「官箴」と言ってよい内容となっている。当時、王元之は棘寺（裁判をつかさどる部署）の官吏であった。この引用箇所は「待漏院記」の冒頭にあたるところである。

◆本文（星川 1963：197〔※左記を参考に小澤が作成〕）：

天道不言、而品物亨、歳巧成者、何謂也。四時之吏、五行之佐、宜其氣矣。  
聖人不言、而百姓親、萬邦寧者、何謂也。三公論道、六卿分職、張其教矣。  
是知、君逸於上、臣勞於下、法乎天也。

◆書き下し文（星川 1963：197〔※左記を参考に小澤が作成〕）：

天道言はずして、品物亨り、歳巧成るとは、何の謂ぞや。四時の吏、五行の佐、其の氣を宣ふればなり。  
聖人言はずして、百姓親しみ、萬邦寧しとは、何の謂ぞや。三公道を論じ、六卿職を分ちて、其の教を張ればなり。  
是に知る、君上に逸にして、臣下に勞するは、天に法ることを。

◆通釈（星川 1963：197-198〔※左記を参考に小澤が作成〕）：

「天道は何も言わずに、それぞれ万物は生育が滞りなくおこなわれて、一年の生育の仕事の結果を成し遂げる」というのは、どのような意味だろうか。その意味は、春夏秋冬の四季という役人や、木火土金水の五要素という補佐官が、天道を助けて、天の《氣》を発展させて広くゆきわたらせることである。

「聖人は何も言わずに、万民が親しみ従い、万国がやすらかに治まる」というのは、どのような意味だろうか。その意味は、聖天子を輔弼する太師・太傅・太保の三公が天下を治める道を論じて定め、それにつづいて冢宰・司徒・宗伯・司馬・司寇・司空の六卿（大臣）が自分の職掌をそれぞれに受け持っていて、その教化を広くおこなうことである。

こう考えてみると、「君主」は上にいて何もしない

で安楽にしており、「臣下」は下にあつて仕事に苦勞することは、天を手本とするものであることがわかるのである。

ここで看過できないことは、まさに《天道がもの言わない》という認識にある。それがどうしてなのかは全くもってわからないのだが、元來《天は有意の存在》であるとされているにも拘らず、決してみずからは語ることをしてしない。もとよりそういうものであるのか、それとも敢えて欲するところではないからなのか、古來より洋の東西を問うことなく、巫覡の徒や預言者、あるいは龜卜の術などが尊まれてきたのも、すべてはこの天が直截に語らぬという一事に起因する。こうして緘黙して語ることのない《天》をめぐる、中国の古代思想が展開した。白川（2003：198-199）に拠れば、『孔子は神のこゝとを伝える聖人たちの教えを明らかにすることを使命として《仁》へと昇華させた。墨子は義として《兼愛》や《交利》の実現を天が求めるものとして《法》や《法儀》としての秩序の原理をめざした。孟子は民意を媒介として天意が示されるとして《仁義》や《王道天下》を秩序の原理に据えた』とする。「待漏院記」ではこの親にしてこの子ありとでもいうのだろうか、天も天子も物言わぬけれども、その意を躰した三公六卿をはじめとして文武百官が孜孜として相務めることによって、万物の《氣》が過不足なく調和をたもって流通するとみている。とはいへ、現実においてはそのような結構尽くしのことなどあるはずもない。だから、先述したように、怠慢なる大臣たちへの戒めという《毒》を含むに至ったのである。

第二の引用箇所「その心は本虚にして物に応じて跡なし」は、典拠を同書卷之五「箴類」にある程正叔「視箴」に求めることができる。

程正叔は、諱は頤で、伊川と号した。北宋時代の人で、河南の出身である。兄の程顥（号は明道先生）とともに、宋学に多大の貢献をした。ちなみにこの兄弟は、性格がまったく異なっていたと伝えられる。島田慶次（1967：55）によれば、「明道は春風和氣、伊川は秋霜烈日」という。そして「兄の明道の学問的、思想的態度が、渾一的、直覺的であるのに対して、弟の伊川は分析的であり、思弁的論理的であるというのが定評である」（1967：58）としている。この二程の学問を、後に朱熹が集大成した。宋学を「程朱の学」という所以である。ところで、この「箴」とは《鍼》に通じ、《誠》のことであり、諷刺する文を指す。そして文は清く理は壯であらねばならないとする（星川 1963：219）。引用箇所は、程正叔「視箴」の全文である。

◆本文（〔星川 1963：232〔※左記を参考に小澤が作成〕〕）：

心兮本虚、応物無迹。操之有要。視為之則。蔽交於前、其中則遷。制之於外、以安其内。克己復礼、久而誠矣。

◆書き下し文（星川 1963：232〔※左記を参考に小澤が作成〕〕：

こころ もと虚き もの おう あと な これ と えう あ  
心 は本虚、物に応じて迹無し。之を操るに要有り。  
視ること之が則たり。蔽前に交れば、其の中則ち  
遷る。之を外に制して、以て其の中に安んじ、己に  
克ちて礼に復る。久しうして誠なり。

◆通 釈（星川 1963：232-234〔※左記を参考に小澤が作成〕〕：

人の心はもとよりむなしく色も形もないものであるが、外部の物にこたえて動きはたらし、その形やあが見えない。この心をしっかりとらえて離さないようにするには要領がある。礼にかなったことを視ることが、心をしっかりとらえて離さない法則である。目の前を覆い隠す物欲が混じって、視ることを邪魔すると、心は移り変わる。外に於いては心を引き惑わすものを抑えとどめ、そうして内なる心をやすらかにし、己の私欲に打ち克って、人の正しい行為の定めである礼に立ち返る。こうして長い間にわたり修養すれば、心にうそ偽りがなくなるのである。

ここで重要なことは、《心が虚である》という認識である。このことは、心に実体がないこと、すなわち対象化することが不可能であることを意味する。けれども、だからと言って存在しないわけではない。確実に存在しているのである。したがって、外部の物の推移によって、心の有りようを推測する以外にない。このことは《天》が決してみずから語ることがないこととパラレルな関係にあることは注目されてよいだろう。

そして、もうひとつ重要なことは、程伊川が近世の日本において《銭探し》の有名な伝説をもつ人物としてもよく知られていたことである。当時の読者は当然のことながら伊川という名を聞けば、この《銭探し》の伝説も想起したはずである。なお、この伝説は『町人囊』巻二（中村 1996：99）に、青砥左衛門の《銭探し》の話とともに記されるが、詳細については第3節で述べることにしたい。

第三の引用箇所となる「天地は万物の逆旅、光陰は百代の过客、浮世は夢幻」は、典拠を同書卷三「序類」の李太白「春夜宴桃李園一序」に求めることができる。

◆本文（星川 1963：101〔※左記を参考に小澤が作成〕）：

夫天地萬物之逆旅、光陰者百代之过客。而浮生若夢。為歡幾何。

◆書き下し文（星川 1963：101〔※左記を参考に小澤が作成〕）：

夫れ天地は萬物の逆旅、光陰は百代の过客なり。而して浮生は夢の若し。歡を為すこと幾何ぞ。

◆通釈（星川 1963：101-103〔※左記を参考に小澤が作成〕）：

いったい天地は、すぐに旅立ってしまう万物が仮にやどる宿屋であり、歳月はやすまずに旅をし続ける永遠の旅人である。そしてこの世はかない夢のようなものだ。宴をひらいて歡樂をむさぼり喜んで、どれほどの時間だろうか、否、ほんの束の間に過ぎまい。

ここで「浮世」という語に、注目しておきたい。もちろん、もともとこの語には、浮かれて生きるという意味はない。しかし、近世の日本においては、つぎの浅井了意の仮名草子『浮世物語』巻一ノ一「浮世といふ事」にみるように、この語に《浮かれて生きる》という特別な意味をもたせている。

◆本文（谷脇 1999：89〔※左記を参考に小澤が作成〕）：

世に住めば、なにはにつけて善し悪しを見聞く事、みな面白く、一寸先は闇なり。……（中略）……哥をうたひ酒のみ、浮きに浮いてなぐさみ、手前のすり切りも苦にならず、沈みいらぬところだての、水に流るる瓢箪のごとくなる、これを浮世と名づくるなり。

◆通釈（谷脇 1999：88-89〔※左記を参考に小澤が作成〕）：

この世に生きていけば、何かにつけて善いことにつけて悪いことにつけて見聞きすることは、すべておもしろく、ことわざに『一寸先は闇』とあるように、将来のことは、どうなるかわからない。……（中略）……歌をうたい酒を呑み、浮かれに浮かれて日頃の憂さを晴らし、懐の中身を使い果たすのも気にかけず、沈み込まない心意気で、水に流れる瓢箪のように浮かれる、この生き方を「浮き世」と名づけるのだ。

こうした諧謔によって表現されている「浮世」という語は、『憂き世』から『浮き世』への転換、すなわち仏教の末世思想にもとづく厭世観から、利他的な現世享楽主義への転換を表現するメルクマールといえるだろう。そして、この「浮世」の出典が、『酒豪』として有名で、享乐的な詩聖である李白による文章とされるときに、こうした一連の文化的な文脈への理會が『日本永代蔵』の読解に及ぶことは想像するに難くない。

谷脇理史（2004：23-24）は「『古文真宝』なる語が普通名詞として、「しがつめらしく、勿体らしく、恰好をつけたもの」の意で用いられていた」と卓見を述べ、さらにそのことから『西鶴は、『古文真宝』から三ヶ所も引用することで、この部分があえて「古文真宝にかまへて」（＝勿体らしく恰好をつけて）書かれたものであることを読者に示唆している」とみている。たしかに、『日本永代蔵』が『古文真宝後集』からの引用を意識的に多用することで、道学者風の文脈をパロディー化することに成功して、娯楽としての読み物として近世の読者に提示することが可能となっている。けれども、矢野公和（2002：25）の指摘するように、「致富道を説こうとした作者が、町人の経済生活の中に思いもかけない人間の裏面を見てしまったというだけの作品ではなく、そこには何かもう一つ意図的なものがあるように思われてならない」という見解にも魅力を感じる。

今のところわたしは、こうした研究の動向を踏まえつつ、この引用の場合、『古文真宝後集』という規範を《引用》によって《異化》することによって、『日本永代蔵』というテキストを《娯楽》とも読めるし、『教訓』とも読めるような《テキストとしての可能性》を、この『日本永代蔵』に与えているように推測する。

この《引用》による《異化》は、私見において、ドイツロマン主義における《翻訳》における問題提起（ベルマン 2008：149-266）と深くかかわる文学表現の本質を提示すると考えているが、本稿の主題とは異なるため指摘するにとどめておく。

### 3 『町人囊』にみる《臨機応変と均衡》の理念

『町人囊』は、長崎の天文暦算家として著名だった西川如見にし かわじょけんによって著された。そして数多い彼の著作の中でも、『町人囊』はもっとも読者が多かったという（中村 1996：412）。同じ如見の著作だった『百姓囊』が《農民》の生き方を対象としたのに対して、『町人囊』は《町人》すなわち《商人》としての在り様や生き方を対象に描かれた。『町人囊』は教訓や思想の書として、世間智をまじえながら実用的な教訓をしるすため、ややもすると取りとめなく雑然とした印象を与えるが、その根本を貫く論理はきちんと筋が通っている。すなわち宋学の立場を守りながらも、それでいて抽象的な議論に陥ることが決してなく、つねに現実や現世の立場を採って描かれるのである（中村 1996：427）。

それでは、第2節で言及した程伊川の《銭探し》の話が、『町人囊』巻二で、どのように描かれているのか、みてみよう。

◆本文（中村 1996：99〔※左記を参考に小澤が作成〕）：

ある或学者のいはく、「儉約けんやくと吝嗇りんしやく（左訓「しはき」）とは弁わきまへがたきものなり。吝りんは私欲しよくより出づ。儉約けんやくは天理てんりより出づ。青砥左衛門あせとの十銭じゅうせんを失ひて、五十銭ごじゅうせんの炬松たいまつを買かひて尋得たづねえたるのたぐひ、是天下これの費ついでをいとひ、私の利けんを忘れたり。儉けんの道なり。異国いこくにも此例このためしあり。程伊川てい いせん雍華おうかの間に至り給ふ時、一貫いこくの銭せんをもつて馬の鞍くらにつけしむ。舎やどりにつきて見るに銭せんなし。僕夫ぼくふのいはく、『今朝けさ装まひし給ふ所にて失はずんば、水わたを渉わたる時おと落おせしものならん』といふ。時に伊川いせんなげき給ひて、『千銭せん可べし惜をしむ』とのたまふ。時に坐中ざちゆうの二人ふたり答へていへるは、『一貫いこくの銭せんを失ふ事は、さてさて惜をしむしき事かな』といふ。又一人のいへるは、『千銭せんは微ましき物なり。何ぞ心こころとするにたらんや』といふ。又一人のいはく、『水中みづと囊中のうと異なる事なし。人失ひとへば人是ひとを得る。又何ぞ嘆なげかんや』といへり。伊川いせんのいはく、『人これを得る事あらば失ふにはあらず。銭せんは天下国土てんかこくに用ある物なり。若もし水中みづに沈しづみなば永く世よに用ゆる事なかるべし。吾われはこれをなげく』とのたまひしも、青砥左衛門あせとのこゝろかはる事なし。いづれも其銭そのを天下てんかの為ために惜をしむみたるもの也。一粒ひとこの米こめ、一枚ひとまいの紙かみも無用に費ついでし失ふは、則すなはち天下てんかの用物もちものを費ついでし失ふ道理ことわりなれば、天下造化てんかの功いさををそこなふの咎とがあり。此このこゝろを守りつゝしむ人は、君子くんしの儉約けんやくにかなふべし』といはれし。

◆通 釈（中村 1996：98-99〔※左記の注釈を参考に小澤が作成〕）：

ある学者が言うことには、「《儉約》と《吝嗇》（※「けち」の意味）」とは区別しにくいものである。《吝嗇》は、《我欲》から生まれる。《儉約》は《天の道理》から生まれる。（日本の）青砥左衛門が十銭を失って、五十銭の松明を買ってみつけることができた類の出来事は、これ天下の損失を嫌って、我欲による利益を忘れて（ものだ）。儉約の道である。異国にもこの例がある。程伊川が雍州と華州（華陰）（※ともに陝西省にある地名）の間に到着なされた時に、一貫の銭を馬の鞍に着けさせた。宿について見てみると、銭がない。下僕の言うことには、『（先生が）今朝旅の準備をなされた場所でなくさなければ、川を渡った時に落としたものでしょう』という。その時、伊川は嘆きなされて、『千銭は惜しむに値する』とおっしゃる。その時、その場にいたひとりが言ったことは、『一貫の銭をなくすことは、さてもさても惜しいことだなあ』という。またひとりが言ったことは、『千銭はわずかなものだ。どうして気にかけるに値するだろうか、いや気にかけるには値しない』という。またひとりが言ったことは、『水の中にあることと囊の中にあることは同じことだ。ある人がそれを失えば、別の人がこれを手に入れる。どうして嘆くことがあるだろうか、いや嘆くことはない』と言った。伊川が言うことには、『もし人がこれを手に入れることがあれば、失うわけではない。銭は天下国土に有用なものだ。もしも水の中に沈んでしまえば、永い間、世の中に用いられることがないに違いない。私はこのことを嘆く』とおっしゃったことも、青砥左衛門の考えとかわることがない。程伊川も青砥左衛門のどちらも、その金銭が失われることを天下にとって惜しんでいるものである。一粒の米でも一枚の紙でも（たとえわずかなものといっても）無くして失うことは、天下にとって役に立つものを無くして失う道理であるので、天地万物を創造し化育する造物主の仕事こそなう罪がある。この分別をつつしんでまもる人物は、《君子の儉約》にかなうはずである』とおっしゃった。

この話が程伊川の逸話が日本で翻案されて、『太平記』巻三八（長谷川 1998：352-353）などにおける青砥左衛門尉藤綱が鎌倉の滑川において《銭探し》をする話となるわけである。青砥の《銭探し》の話は、西鶴の『日本永代蔵』巻五ノ四や『武家義理物語』巻一ノ一

などにも散見されることからみて、当然のことながら、当時の読者においては周知のことであったことがうかがえる。

『日本永代蔵』の読者は、もちろんこの青砥左衛門の《銭探し》の話を《共有する知識》として知っていた。そして、さらに『町人囊』も多くの読者を持っており、さらに貝原益軒とともに版もさまざまな種類を有すること（中村 1996：412-416）を考慮するとき、『日本永代蔵』の読者の多くが、『古文真宝後集』の程伊川の引用から、程伊川の《銭探し》＝青砥左衛門の《銭浅し》という話の連想をいだいたといえる。

さて、本稿の最後に、第2節で述べた現世享楽主義が、当時の町人においてどのように理會されていたのか、それが端的にわかる『町人囊』巻一の話をみてみよう。

◆本文（中村 1996：89-90〔※左記を参考に小澤が作成〕）：

或る人の咄に、<sup>はなし</sup>「去商人の口ぐせに、<sup>さる</sup>『商人と屏風は曲まねばたゞず』といひて、手わろきわざもありしに、あるとき家の年久しき古屏風の精<sup>せい</sup>妖<sup>ぼう</sup>て、商人の夢に見えていはく、<sup>としごころ</sup>『年比われを曲めるものとのみ思ひ給ふこそ口惜しく侍れ。ゆがめてたてるは我心にあらず。のぶとちゞむとこそわが徳用なれ。しかれ共強<sup>どもしめ</sup>ひら開きのぶる時は片時<sup>へんし</sup>もたちがたし。また又た、みちゞむ事過ぐる時は、猶ひとり立ちがたし。のぶとちゞむとの中道をうるときは、久しく立ちて危からず。そのうへ立所の地平らかに正しくたてざれば、<sup>すなはち</sup>則<sup>すなはち</sup>くつがへりたをれり。是第一の用心なり。主も先その一心の地をたいらかに正しくして、其上に商売ののべちゞめを考へて、あまりに開かずあまりにちゞめずして、能程に身を立つるときは、いつまで立ちても危き事なかるべし。主<sup>この</sup>ことほりをしらずして、我をゆがめるとのみ心得給ふは口惜しく侍り』と恨みけるとかや。おかしき事ながらも、捨てがたきことほり侍るにや。

◆通釈（中村 1996：89-90〔※左記の注釈を参考に小澤が作成〕）：

ある商人の話では、「さる商人の口癖に、『商人と屏風は曲がってないと成り立たない』と言って、商売上よくない手段もあったが、あるとき家に長年ある古い屏風の精が化けて、商人の夢の中に現れて言うことには、『長年わたし（＝古屏風の精）を曲がっ

ているものだけ、あなたが思っただけでいらっしやることは残念です。曲がって立っていることはわたしの本質ではありません。伸びることと縮むことが、わたしの特長です。そうはいっても、無理に開いて伸びる時は少しの間も立つことは難しい。また、畳んで縮めることが過ぎる時は、やはりひとりで立つことが難しい。伸びることと縮むこととの中庸を得る時は、長い間立って危険でない。その上、立つ場所の地面が平らで正しく立っていないと、すぐに覆って倒れた。これは第一の用心すべきことである。主人もまずその思慮分別の基盤を平らで正しくして、その上に商売の拡張や縮小を考えて、過度に拡張せず過度に縮小せずに、うまい程度に生計を立てるときは、いつまで立っていても危険なことにはないに違いない。主人がこの道理をわからないで、自分（＝古屏風の精）を曲がっているとだけ理解なさることは、残念です』と恨み言を言ったとかいうことだ」という。滑稽なことだけれども、うち捨てにくい道理とかがあるようです。

ここでしめされる「ある商人」は、屏風が曲がらねば立ってられないということから、道徳的に曲がった手法、すなわち違法な手段や社会倫理に反する手段をもちいて、かせぐことを商人の心得としてみている。これに対して、「古屏風の精」はこの「ある商人」の理會を間違ひであると否定する。そして、屏風は曲がらねば立ってられないが、曲がりすぎて閉じてしまっても立ってられないことから、《不道徳であること》に商売の心得があることではなく、《伸縮自在であること》に商売の要諦があると論ず。それは《状況に応じて事業の伸縮を臨機応変に行なう能力》であり、そのためには「中道」つまり《均衡》を見極める能力が肝要であるとする。

このことを踏まえて、『日本永代蔵』の冒頭部分を解釈すると、以下ようになるだろう。すなわち、この世には何らかのバランスが存在するが、《天道》がものごとがたならぬために、それが何かを人は明確には知ることができない。また、人の《心》も実体がなく《虚》であるために、状況に応じて変化して捉えどころがない。こうしたことから、人は《現世享楽主義》になる。場合によっては、道徳にとらわれないだけにとどまらずに、反道徳的にさえなる。しかし、何らかのバランスが存在する以上、反道徳的に気ままにしていることは、ある基準にさからうという点で、逆にその基準にとらわれていることになる。そして、この一方的な行動は、バランスに配慮しないことで、均衡を一方的に破壊することにつながる。むしろ、人は周囲の《均衡》をはかることを見極めなが

ら、己の事業を状況に応じて臨機応変に伸縮することがとなる。近世において、町人にこうした現実主義が存在したことは、世界史からみてもきわめて興味深いことである。おそらく、ほぼ同じ時代に、荻生徂徠が『政談』をあらわしたことも決して偶然ではない。

### 参 考 文 献

島田虔次 (1967)：島田虔次著『朱子学と陽明学』(岩波新書，岩波書店，1967年)。  
白川静 (2003)：白川静著『孔子伝』改版 (中公文庫，中央公論新社，2003年)  
谷脇理史 (1996)：谷脇理史校注訳，井原西鶴著「日本永代蔵」(『井原西鶴集 三』，新編古典文学全集68，小学館，1996年)。  
谷脇理史 (1999)：谷脇理史校注訳，浅井了意著「浮世物語」(『仮名草子集』新編古典文学全集64，小学館，1999年)。  
谷脇理史 (2004)：谷脇理史著『経済小説の原点』(日本

永代蔵』(西鶴を楽しむ2，清文堂，2004年)。  
中村幸彦 (1996)：中村幸彦校注，西川如見著「町人囊」(『近世町人思想』日本思想大系新装版，岩波書店，1996年)。  
野間光辰 (1960)：野間光辰校注，井原西鶴著「日本永代蔵」(『西鶴集下』日本古典文学大系48，岩波書店，1960年)。  
長谷川端 (1998)：長谷川端校注訳，『太平記四』(新編古典文学全集57，小学館，1998年)。  
ベルマン\_アントワヌ (2008)：アントワヌ・ベルマン Antoine Berman 著／藤田省一訳『他者という試練 ロマン主義とドイツ文化と翻訳』(みすず書房，2008年 [原著：ガリマール，パリ，1984年])。  
星川清孝 (1963)：星川清孝訳注，『古文真宝 (後集)』(新釈漢文大系16，明治書院，1963年)。  
堀切実 (2009)：堀切実訳注，井原西鶴著『日本永代蔵』(角川文庫，角川学芸出版，平成21年)。  
矢野公和 (2002)：矢野公和著『虚構としての『日本永代蔵』』(笠間書院，2002年)。

— Readings and Considerations  
— *Nippon-Eitai-gura* (日本永代蔵), *Kobun-shinpou-koushuh*  
(古文真宝後集) and *Chounin-Bukuro* (町人囊) —

Jiro OZAWA

**Abstract :** This paper is intended to touch Wisdoms in the world through reading of Sacred Scriptures. This time we expand the scope. Here we consider *Nippon-Eitai-gura* (日本永代蔵), *Kobunshinpou-koushuh* (古文真宝後集) and *Chounin-Bukuro* (町人囊). To be concrete, we consider the followings : 1) the ideology in the beginning of *Nippon-Eitai-gura* (日本永代蔵), 2) the quotations from *Kobunshinpou-koushuh* (古文真宝後集), 3) “the adaptation to circumstances and the balance” in *Chounin-Bukuro* (町人囊).

**Key Words :** *Nippon-Eitai-gura* (日本永代蔵), *Kobunshinpou-koushuh* (古文真宝後集), *Chounin-Bukuro* (町人囊), this transient world, epicureanism, quotation, adaptation to circumstances, balance.